

令和7年4月30日

令和6年度 自己評価・学校関係者評価報告書

学校法人若杉学園 幼保連携型認定こども園若杉幼稚園園長 東山由紀子

学校法人若杉学園 幼保連携型認定こども園若杉幼稚園学校関係者評価委員会

1. 園の教育目標

1.がんばる子 2.考える子 3.思いやりのある子	自主及び自立の精神の芽生えを養い、「知育・体育・徳育」の調和のとれた人材を育成する。
---------------------------------	--

2. 本年度の重点課題(学校評価の具体的な目標や計画)

「それぞれの子どもの発達段階に合った遊び方を提供する」

3. 評価項目の取り組み状況・達成結果の評価

A:十分成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果は感じられなかった

		自己評価		学校関係者評価委員会	
評価項目	評価	取り組み状況及び成果		評価	意見
子どもをよく観察し、 一人ひとりに対する理 解を深める 保育教諭も環境の一部	B	・遊びの様子を観察し、したい遊びができているかを子ども同士の関 関性も把握しながら職員間で共有して個々に合った援助につなげた。 ・子どもたちが自分で考えることができるよう、すぐに声をかけるこ ことを控え、言い過ぎに注意した。その結果、子ども自らしようとす る気持ちが高まった。また、けんかの場面では自分で思いを伝えら れるようになり、子ども同士の関係性にも変化が見られた。		A	・一人ひとりに対応することは大変であるが、個々によって できることは異なるので、まずは、一人ひとりに対応して いくことが大切であると思った。 ・モノの環境だけでなく、友達や先生も影響を与える環境の 一つであり、とても大切な要因であることだと思った。

であるという認識を持つ		・注意が多くなりがちなので、出来ていることや出来たときの声かけ（認める、褒めるなど）を大切にするようにした。 ・学年の教員全員で情報を共有することに努めたため、育ってほしい姿など、共通の認識を持って関わる事ができた。 ・友達や保育教諭との関わりの中で、自分を出せる子が増えた。 ・個人差があるので、活動によっては個別の目標を決めて対応した。その結果、自分なりに取り組もうとする姿が増え、すぐ諦めることが減った。 ・運動会・発表会は子どもと保育教諭と一緒に作り上げていくという気持ちで取り組んだことで、共に楽しみながら達成感を感じることができた。 ・こうなってほしいという保育教諭の思いが強すぎてもうまくいかなかった。子どもの状態を把握しながら冷静に対応することが必要。 ・苦手なことや出来ないことに目を向けると、一人ひとりの課題や今後の目標が見えてくる。一人ひとりの育ちを把握し、課題を押さえながらその子に合わせた関わりをしてきた。気持ちに余裕がなくなると、プラス思考が保てなくなり困難さも感じた。
子どもの発達段階にあった遊び方の提供 自分の体を思いきり動かせるように全身を使った遊びの工夫	B ・一人で遊ぶことを大事にし、机の配置を見直して集中して遊ぶことができるようにした。 ・自分で遊びを見つけられない子、友達と一緒に遊びたい子、遊びが続かない子など、保育教諭がその子に合わせて遊びに誘いかけた。保育教諭がいなくなると遊びが続かない子もいた。 ・ルールのある遊びは、教え合いながら遊ぶことができるようになってきた子がいた。分からないからやらないという子には遊び方の見本を提示すると、遊びのバリエーションが広がった。 ・集団遊びをいくつか紹介し、ルールを教えていった。遊びの選択肢が広がり、友達と相談しながら進める機会も増えた。	A ・自宅でも母親として常にプラス思考でいることは難しく、多くの子どもたちを相手にしている先生方には常に感謝している。 ・集団で生活しているが、その集団は個々が集まってできている。個を大切にしていることを伺い、一人ひとりとは違うということを改めて考えさせられた。 ・個々のしたいことを読み取り、それに応じて環境を構成していることがよく分かった。 ・大人は子どもの見本となるように心がけていることがよく分かった。そのためには時間と気持ちの余裕をいかに作るかも大切である。 ・保育者主導ではなく、子どもたちにいろいろな遊びを提供することで子どもの育ちを育むことができていた。その結果が、クラスでのカブラや生活教材を使った遊びに生きていったと思う。 ・保育教諭の立ち位置などを再認識できたことはよかった。今年度の気づきを活かして保育を進めていくことを願う。

		・〇〇博士（得意、よく知っている）を作ること、子ども同士が言葉で伝え合いながら遊びを進めていくことができるようになった。友達に頼られることが自信にもつながっている。 ・年少はボディペインティングから絵の具遊び（筆で段ボール・紙に塗る、書く）にしたが、全くやらない子はいなかった。年中を真似て、手足に塗っている子もいた。 ・生活教材を使った製作は早めに始めたことで、作るものが変化していった。友達の刺激を受けながらイメージを広げ、作ることを楽しんでた。 ・体を動かして遊べる時間を多く持つようにした。 ・他学年の活動を見ることで興味関心が持てるような機会を多く作ったところ、張り切って取り組む姿が見られた。 ・山登りでは、自分の手足を意識してコントロールする経験ができるようになっていった。 ・体を動かしたり、自分の好きな遊びを楽しんだりすることで気持ちが発散され、その後の活動に落ち着いて取り組むことができた。 ・活動の合間に多様な動き（ハイハイ、背中歩き、お尻歩き、お芋ゴロゴロ、ワニ歩き、ライオン歩きなど）を取り入れたことで、体の使い方が少しずつ変わってきた。 ・寒い時期こそ、戸外に出ることを意識した。太陽の光を浴びると元気になることが、子ども自身実感できたようだ。 ・子どもたちだけで遊ぶことが増えたが、自分本位に遊びを進めたり、相手の気持ちに気付けない子もいるため、遊びを見守りつつ、必要に応じて援助していった。		・家庭では思う存分体を動かしてあげられないので、園でたくさん体を動かしてきてくれることがありがたい。 ・山登りの体験はなかなかできないので、今後も続けて欲しい。 ・他のクラスや学年の様子を見て学ぶことを大切にしていることがよく分かった。 ・体操や英語など全体で取り組む活動もある中で、個々に合わせた関わりは難しいと思うが、子どもたちが無理なくできるように工夫していることが分かった。 ・子どもたち一人ひとりの発達段階を理解し、遊びの提供につなげようと努力していることがよく分かった。 ・自然現象を生活に取り入れて、成長につなげようとしている。
異年齢児とかかわれるような遊びや時間の持ち方	C	・園庭で遊ぶ中で、異年齢児の遊びを真似たり、関わって遊んだりする姿が見られるようになった。 ・週に一回遊ぶ機会を設定したり、仲良しクラスでおにぎりを食べたり、散歩や山登りをしたりする機会を積極的に持つようにした。	A	・異年齢児との関わりでしか感じ取ることのできないこともあるので、とても大切なことだと思う（思いやりの気持ち、かかわり方等）。 ・構えず、気軽な感じでクラスを行き来することは、お互いにメリットもたくさんあると思われる。

		・運動会や発表会の様子を見ることで、憧れの気持ちを抱き、「やってみたい」という意欲につながった。年少児も活動を見てもらうことで自信につながる。 ・2歳児・満3歳児は年少保育室に行って、年少児は年中保育室に行って一緒に給食を食べたり遊んだりした。その中で、小さい者は来年度の生活を体験し、期待を持った子もいた。大きい者は場面や相手に応じた適切な行動を褒められて自信を持ち、年長者としての自覚を強めた。		・子どもたちにとって「見られる」「見る」ことで、小さい子は大きい子へのあこがれにより成長していく。また、大きい子は自信や意欲、自覚につながり相乗効果は大きいため、今後も続けて欲しい。 ・こども園の利点を活かして生活していることが分かる。
園周辺の身近な自然に親しみ、園の環境や施設を把握しながら十分活用する	C	・山登りをして、園では見られない落ち葉の色の美しさや風に舞う様子などを見たり落ち葉の上を歩く感触を味わったりして、景色の移り変わりに気付いた。 ・今夏は暑さが厳しく、散歩に出られない日が多かった。時間帯に配慮して、工夫して虫探しに出かけた。 ・あえて同じ所を通ることで変化に気づけるようにし、農作物や果物、草花に関心が持てるように話をしていた。 ・虫を見つけた時には、図鑑で名前を一緒に調べ、その生活を伝えたり、観察ケースに入れて観察したりできるようにした。 ・図鑑を活用し、見つけたものにシールを貼ったりした。 ・散歩や山登りに行く時間があまりとれなかったが、子どもたちは短い時間でも季節の変化を感じ取り、色々な発見を楽しんでいた。	A	・園周辺の自然を有効に活用してほしい。 ・季節毎の景色の移り変わりを感じながら生活できている。 ・どのクラスも散歩をふんだんに取り入れていて、季節を感じながら体力づくりもできている。 ・同じコースで散歩することで、色々な発見がある。 ・散歩で発見した物事を調べたり、採取した生物を飼育栽培したりすることを楽しんでいる。体験したことで知識が広がっていることが分かる。 ・散歩の中にも子どもの成長への願いを感じる。 ・安全確保のためのマニュアルと人員を考慮していくことが課題である。
保育教諭間の連携と安全管理	B	・職員同士声をかけあって、子どもたちの行動を見守るようにした。 ・予定や子どもの様子、関わり方など、打ち合わせで共有できていたので、補助に入りやすかった。担任と補助が知っている情報を互いに話すことで情報が広がり、困りごととも学年全体で一緒に考えることができた。 ・補助教諭同士落ち着いて話す時間はとれなかったが、隙間時間を使って情報を交換、共有するように努めた。	A	・場面が変わったら人数確認をするなど、子どもたちをよく見て気を付けていることが伝わる。 ・職員間の打合せの時間をどう作っていくのが課題。 ・全職員が同じ対応や思考をすることは困難であるが、それこそが安心して園で過ごすことのできる大きな要因であるので、職員間の連携や情報共有は大切に、強化していきたい。

	・遊具の使い方、玩具の遊び方の共有や危険個所を把握する。また、個々に合った対応の仕方と目指すものを教諭間で統一する。そして、子どもの成功体験の共有と共感をする。 ・担任不在時や預かり保育時など、子どもの登降園状況の把握に課題が見つかった。チェックリストを作ったり、学年での欠席者を共有したりと改善策を試みているが、課題は残る。 ・場面が変わったときに、複数での人数確認を意識した。 ・バス乗車や預かり保育で、確認不足によるミスがあった。	
--	---	--

4. 自己評価結果と学校関係者評価の結果を踏まえた、学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

結果	理由
B	・コロナによる生活様式の変化が、子どもの成長や親の養育態度に如実に表れてきていると感じたため、さらなる保育内容の見直しを必要とした。行事については、コロナの前後で見直しも進めてきたが、前年度の反省をもとに目の前の子どもたちの状態を踏まえて更なる見直しを進めてきた。以前の形にとらわれすぎずに柔軟に対応してきたことで、子どもが無理することなくのびのびと活動できていたと考える。 ・新たな取り組みとして「保育参加」を実施したことで、園での子どもの様子を間近で見ていただくことができた。また、職員の仕事を疑似体験していただいたことで、幼稚園に対する理解も進んだように思われる。 ・集団を構成しているのは個人であるという認識を全職員で共有し、集団としての達成目標だけでなく個別の目標も設定して対応してきた。 ・継続して個人の成長発達に対する理解を深め、担当職員で情報を共有してきた。個の理解を深めることが集団を理解することにもつながり、時期や年代に合わせたクラス運営を常に意識することができた。 ・結果だけではなくそこに至るまでの過程を大切にし、子ども本人だけでなく保護者にも伝えるようにしてきたことで、お互いを認め合えるようになった。このことは、本人の自信となり自己肯定感を高めることにつながった。 ・引き続き、時期や発達段階に応じた遊びの環境を構成しながら、様々な形態の玩具を提供した。子どもが興味関心に応じて自由に選択できたことで、自分のしたい遊びに集中できるようになった。自分の得意を極められる時間や場所を確保することで他児の興味関心を刺激し、互いの意欲向上につながった。 ・意識して園庭での活動を今まで以上に取り入れたことで、異年齢児との触れ合いが増え、遊びを介して自然と縦割りの活動ができていた。 ・動画配信やInstagramによる園での生活の様子の配信や預かり保育等を利用する保護者とお迎え時に会話したりすることで、より家庭との連携がよりスムーズになったと考えられる。半面、園に訪れる機会の少ない保護者との情報共有の在り方については課題として残っている。

- | | |
|--|--|
| | ・安全確保のための情報の共有については日々意識することが大切である。もれなく情報を共有するための方策を検討し続けていくことが必要である。 |
|--|--|

5. 今後取り組むべき課題

◎教職員の資質向上

- ・信頼関係を築きながら個々の状態を把握し、安心して自分を出せる場を作る。その時々合った関わりの中で、自分でやってみようという気持ちを支える。
- ・出来ていることを言葉にして伝え、自信につなげる。マイナスの言葉かけを減らし、プラスの言葉かけを増やす。
- ・好きな遊びを見つけられるように、自由に遊べる時間の確保や集中して落ち着いて遊べる環境作りに努める。
- ・子どもと保育教諭が「鏡」の関係にあることを忘れず、子どもたちのモデルとなるべく気持ちに余裕を持って、冷静さを保って接する。
- ・集団としての達成目標だけを決めるのではなく、一人ひとりの育ちに合った達成度を探して、無理のないように進めいく。
- ・『ほめ育』への取り組みの中で、園児だけでなく職員自身の自己肯定感を高めていく。
- ・新規採用職員のフォローアップを含めた園内研修の計画と実行に取り組んでいく。

◎職員間の連携と安全管理

- ・子どもたちの安心と安全のために職員をどう配置していくかを再検討する。
- ・情報の共有をクラス単位でなく学年全体での共有するために、共有の仕方や時間を検討し実行していく。
- ・災害を含め、子どもの安全に必要な手立てを園全体で考えていく。避難訓練についても従来の計画の見直しを進めていく。
- ・職員一人ひとりが園内の約束事を順守し、確認を怠らないようにする。複数の目で確認することでミスの防止につなげていく。

◎保護者支援

- ・園を訪れる機会が少ない保護者との関わりが円滑にできるように、工夫し改善していく。
- ・働く保護者が増えてきていることで、参観会や各種行事の開催時期や回数などの検討を進める。また、父母の会の活動の在り方についても検討する。
- ・コロナ禍での子育てを経験してきた保護者に対する支援の在り方について、全職員で検討していく。担任だけでなく全職員で見守るという姿勢を崩さず対応していくための方策を検討していく。地域の子育て支援については、ニーズを探りつつ、園でできることを探っていく。

◎幼小接続

- ・近隣の小学校や就学前施設との連携を確保し、教育の接続を図る。